

# リカードオの貨幣理論に関する一考察

——古典的貨幣數量説と地金論争——

中 西 充 子

## 一

ナポレオン戦争に伴うイングランド銀行による兌換停止、それに続く通貨の混乱はイギリスにおいて地金論争を展開させることになるが、リカードオ (David Ricardo) の経済著述家としての登場は、この地金論争に参加することからはじまったといわれている。

兌換停止期 (一七九七—一八二一年) の初期においては、通貨当局の慎重な政策によって兌換停止による影響は軽微であった。発券は非常に注意深く行なわれ、為替相場は一七九九年の末までは順調であったし、金地金の価格も、その造幣価格三ポンド一七シリング一〇・五ペンスを維持したのである。しかし、その後次第に発券高は増加し、物価および金地金の価格は騰貴し、そして為替相場は下落した。すなわち、一八〇九年の第2・四半期から発券高は急激に増大しはじめたが、一八一〇年には、一八〇六年と一八〇七年の一、六八〇万ポンドならば

リカードオの貨幣理論に関する一考察

## リカードオの貨幣理論に関する一考察

に一八〇八年の一、七一〇万ポンドに対して、平均二、二五〇万ポンドであった。物価は一八一〇年の第1・四半期までに、かつてないほど騰貴した。指数で示すと、一七九〇年の一〇〇に対して、また兌換停止前の年の一三六に対して一八四であった。一八〇九年に、金地金の価格はほぼ四ポンドから四ポンド一〇シリング以上に騰貴した。さらに為替相場は一八〇八年から、一五―二〇%の逆調となったのである。<sup>(1)</sup>

このような状態に刺激されてリカードオは、一八〇九年、モーニング・クロニクル紙(Morning Chronicle)に、銀行券減価の証拠として金の価格に関する最初の寄稿をし、当時の通貨問題に対する一般の注目を集めることになった。

地金論者としての彼の主張を要約すると、物価の騰貴、金地金の高価および為替相場の下落は、いずれも、兌換停止下におけるイングランド銀行券の過剰発行にもとづく減価の結果、ひき起こされたのである。そこでその弊害を除去する最も適切な方策は、兌換を再開して過剰な通貨を収縮することであるというのであった。この主張からも明らかのように、リカードオは彼の地金論争関係諸論文において、貨幣数量説の見解に立って議論を展開している。この数量説の立場は他の地金論者たちの議論においても見出されるが、一八一〇年の地金報告書も、貨幣数量説の古典的説明を含んでいた。そして、「数量説の働きとしての全盛期は地金委員会の報告に続く世紀のイギリスにおいてであった。経済学者ばかりでなく、官僚の首脳者たちも、またそれを政策目的の主たる道標として受け入れていた。」<sup>(2)</sup>といわれるように、地金論争は数量説を実際の通貨問題に関連づけ、それが貨幣に関する重要な原理であるということ認識させることになったのである。したがって地金論争の研究には、われわれがリカードオとともに想起するところの、この古典派の原理について検討することが必要である。

本稿においては、リカードオの貨幣理論の中核をなしている古典的貨幣数量説を、地金論争との関連において考察したいと思う。

(1) John Clapham, *The Bank of England, A History*, Cambridge, 1958, Vol. II, pp. 19—20, 21. 英国金融史研究会訳『イングランド銀行の歴史』II、二三—二四ページ。

(2) R. F. Harrod, *Money*, London, 1969, p. 153. 塩野谷九十九訳『貨幣—歴史・理論・政策—』一八二—二八三ページ。

一

経済の実物面と貨幣面とを完全に分離し、両者の結合を考慮しなかったことが、古典派経済学における根本的な欠点の一つであるといわれているが、このことは、リカードオの理論体系においても明白な事実であった。主として、生産および分配が中心問題であった『経済学および課税の原理』(On the Principles of Political Economy and Taxation)における彼の関心事は当然、実物経済面の分析であり、貨幣面に関する叙述は、この著書においてわずかな部分を占めているにすぎない。実物面と貨幣面の分離については、『原理』において展開された彼の価値論を検討することによって一層明らかにされるであらう。

リカードオは商品の交換価値が、投下労働量によって平均的に決定されなければならないことを主張したが、農産物の交換価値を論ずる場合に、その投下労働量は、最も不利な条件をもつ最劣等地における限界的な最大投下労働量であるとした。そこで彼は単純な労働価値説を用いて、どのようにして小麦の価格が騰貴するかを示したが、次のように述べている。「……仮に、一〇人の労働が一定の質の土地で一八〇クォータの小麦を取得し、そ

してその価値は一クォータにつき四ポンド、すなわち七二〇ポンドであるとし、さらに一〇人の追加労働が同一の土地またはある他の土地で、一七〇クォータしか追加生産しないものとしよう。その場合に、小麦は四ポンドから四ポンド四シリング八ペンスに騰貴するであろう。……すなわち、一七〇クォータの生産には、一方の場合には一〇人の労働が必要であり、他方の場合には九・四四人の労働が必要であるにすぎないから、騰貴は九・四四対一〇、すなわち四ポンド対四ポンド四シリング八ペンスになるであろう。<sup>(1)</sup>」

要するにリカードオによれば、「原生産物の比較価値が騰貴する理由は、取得される最終部分の生産により多くの労働が使用されるから<sup>(2)</sup>」であり、生産の困難という原因が穀物の交換価値を引き上げ、ひいては地代の騰貴により地主がより多くの分け前を獲得することになるのであった。なお、彼は人口が増加するにつれて、穀物のような必需品の価格がそれを生産するにより多くの労働が必要である故に、不断に騰貴しつづけることを指摘している。<sup>(3)</sup>

このようにリカードオは、商品の交換価値、したがって価格が労働に依存するものと見たが、価格が需給関係によって決定されるというマルサス (T. R. Malthus) 等の需要供給説に反対している。彼は商品の価格を支配するものは、あくまでも生産費であつて需要供給の関係でないことを強調するのであるが、もちろん全く需要供給説を無視したわけではなく、独占財の価格については需要供給説を適用しており、また他のすべての商品の価格も、短期間における市場価格については需給関係の変化によって影響されることを十分認めている。

以上が、労働価値説にもとづいた、リカードオの生産物市場における相対価格決定に関する見解である。

他方、貨幣面に関しては『原理』第二十七章『通貨と銀行について』の中で議論が展開されているが、この章に

おけるリカードオの貨幣理論の注目点は、彼がその冒頭で述べているように、貨幣の「数量と価値を左右する一般法則」すなわち、貨幣数量説であった。

まずリカードオは、金属貨幣の価値について次のように述べている。「金および銀は他のすべての商品と同様に、それを生産して市場にもたらすのに必要な労働量に比例する価値をもつにすぎない。金は銀よりも約一五倍より高価であるが、それは金に対してより大なる需要があるからでもなく、また銀の供給が金の供給よりも一五倍より大であるからでもなくて、もっぱらその一定量を取得するのに一五倍の労働量が必要であるからである。」すなわち、彼は金属貨幣と普通一般の商品とを同様に見る立場から、労働価値説を金属貨幣の場合にも適用するのであるが、金属貨幣の価値がその素材である金、銀の生産から、鑄造されて流通にもたらされるまでの投下労働量によって決定されると考えたのである。

金属貨幣の価値決定に対し労働価値説が適用されるのは、国家が鑄造権を有する場合でも同様であった。この点について彼の述べるところによれば、まず国家が貨幣を鑄造して造幣料を徴収しないならば、その貨幣はそれと同品位および等量の地金の価値に比べて、同価値である。しかし、もし国家が造幣料を徴収するならば、一片の鑄貨は徴収された造幣料の全額だけ、未鑄造の金属片の価値を上回るのであって、その理由は、その鑄貨がそれを獲得するのに労働量を多く要する、すなわち、より多くの労働量の生産物の価値を要するからであるという。

ところがリカードオは、国家だけが鑄造権を独占している場合には、鑄貨の数量を制限することによって造幣料を無限に引き上げることができ、したがって鑄貨の価値をどこまでも高めることができると主張する。要する

リカアドオの貨幣理論に関する一考察

に、鑄貨の価値の大きさはもはや投下労働量の大小とは関係なく、鑄貨の数量の多小によって決定されるというのであって、これは素朴な貨幣数量説の表現である。そして、彼はこの原理を紙幣の場合にも適用し、次のように述べている。「紙幣の全製作費は造幣料と考えられる。それは少しも内在価値をもたないけれども、しかもその数量を制限することによって、その交換価値は相等しい称呼の鑄貨、またはその鑄貨に含有される地金と同じ大いさになる。また同じ原理にもとづいて、すなわちその数量の制限によって、劣質の鑄貨もそれが実際に含有する金属量の価値ではなくて、それが法定の量目と品位とをもつ場合に保有すべき価値で流通するであろう。」<sup>(6)</sup>

このように紙幣についても、その実質価値と名目価値との差は造幣料に相当すると考えるリカアドオの見解は、すでに一八一一年の『ボウズンキット氏への回答』(Reply to Mr. Bosanquet's Practical Observations on the Report of the Bullion Committee)の中にも見出される。<sup>(7)</sup>

以上のような議論に続いて、彼は紙幣発行におけるその数量制限の重要性を特に強調し、紙幣数量が本位として定められている金属の価値に従って調節されるべきであり、正貨兌換は紙幣の価値安定に必ずしも必要でないとする。しかし、紙幣の無制限発行権乱用の弊害を避けるといふ点から、正貨兌換義務を紙幣発行者に課すこと<sup>(8)</sup>によって紙幣の発行を統制すべきであると論じている。

ここで注目すべきことは、リカアドオが貨幣の価値を論ずる場合に一方において、一般価値論においてとるところの労働価値説を貨幣にも適用し、労働を以てその価値の根拠とした。しかし他方において、貨幣数量説により数量の関係から貨幣の価値を説明しようとしたことである。このことが貨幣数量説に対する彼の立場について矛盾する点として指摘されているところであるが、このような見解はミル(J. S. Mill)の理論においても見られ

ることであり、この問題についてはさらに詳細に検討されなければならない。

リカードは投下労働量によってではなく、稀少性、すなわち需給関係によってだけ価値が決定される商品があることを指摘したが、その中に独占財が含まれていた。したがって、国家が鑄造権あるいは紙幣発行権を独占している場合の貨幣を、一種の独占財と見て需要供給説を適用し、数量の制限によって、その価値を投下労働量と無関係に定めようと考えたところと解釈するのが一般的である。また当時のイギリスは兌換停止による不換紙幣流通の時代であり、『原理』が刊行された一八一七年には、すでに過剰発行の弊害が知られていた。故に、彼は貨幣数量説を前面に押し出し、発券高の制限を特に強調したのであった。さらに正貨を商品の一種と考えれば、貨幣の価値を説明するのに労働価値説が適用されるであろうし、不換紙幣の場合にはそれに造幣料が課せられた、すなわち、それだけの労働量が投下されたものと見るならば、労働量によって説明される貨幣価値の根拠と数量の関係によって説明されるものと、二つの価値の根拠が説明されるであろう。

- (1) The Works and Correspondence of David Ricardo, edited by Piero Sraffa, Cambridge, 1951—1955, Vol. 1, p. 83n. 『リカード全集』Ⅰ、九八ページ注。
- (2) Ibid., p. 74. 同上、八七ページ。
- (3) Ibid., p. 101. 同上、一一八ページ。
- (4) Ibid., p. 352. 同上、四〇四ページ。
- (5) Ibid., p. 353. 同上、四〇五ページ。
- (6) Ibid. 同ナ。
- (7) Works, Vol. III, p. 223. 『リカード全集』Ⅲ、二六二ページ。

三

貨幣の価値がその数量に依存するという主張は、物価が貨幣量に支配されるとする明確な貨幣数量説の見解として、『原理』のその他の章においても示されている。「すべての商品が同時に騰貴しうるのは、貨幣量に追加がなされる場合だけである。<sup>(1)</sup>」

「仮に新鉱山の発見、銀行業務の濫用、あるいは何か他の原因によって貨幣の数量が大いに増加するとすれば、その究極の結果は貨幣量の増加に比例して、諸商品の価格を引き上げることになる。<sup>(2)</sup>」

このような貨幣数量説の立場は、リカードオの地金論争関係諸論文において一層明確に表現されている。すなわち、彼は『地金の高価』(The High Price of Bullion, a Proof of the Depreciation of Bank Notes)において、まず貴金属の国際分配論から議論を進めているが、彼によれば、<sup>(3)</sup>各国の貴金属の割合は常に一定であり、均衡を保っているという。貴金属はそれぞれの国の商業や富の状態に応じて、各国の間に一定の割合で分配されている。

この均衡状態の下においては、貴金属は各国において同一価値、同一購買力を有するものとされるために、貴金属の輸出入をうながす誘惑は生じ得ない。しかし、もし今ある国において金鉱山が発見され貴金属が増加したとすれば、また鉱山の発見される代りに、イングランド銀行のような流通媒介物として銀行券を発行する機能を有する銀行が創設されて、そのために通貨量が著しく増加したとすれば、通貨価値は下落しそれに比例して物価は騰貴する。その国と他国との間の均衡は、铸貨の一部を輸出することによってだけ回復されるというのである。



同様に『ボウズンキット氏への回答』においても、「諸商品の価格が貨幣の増減に比例して上下するであろうということ」を、私は論議の余地のない事実として前提する。<sup>(4)</sup> また「一部は金から、一部は紙から成り立っている通貨に、紙幣の増加によって追加が行なわれるならば、全通貨の価値が減少させられるであろう。言葉をかえれば、金貨および紙幣で評価された諸商品の価格が上昇するであろう。紙幣の増加のあとでは、同じ商品がより多くのオンスの金貨を買うのである。なぜなら、それはより多くの量の貨幣と交換されるであろうからである。<sup>(5)</sup>」と述べ、貨幣量の変化が物価に影響を及ぼすことを強調した。

このように貨幣量と物価の間の密接な関係の問題にしたリカードは、イギリスにおけるある商品の価格の、金屬本位貨幣を有する外国における同じ商品の価格に比べての相対的騰貴という現象が、イギリス通貨の過剰の程度に比例することを認めた。しかし過剰発行が存在することを、実際にこのような価格の比較によって判定しうることを示唆しなかつたのである。当時、物価指数という概念はまだよく用いられていなかったし、物価の國際的比較を試みることも、ほとんど不可能であつた。彼にとつて物価の一般的傾向とか、貨幣の一般的購買力の傾向が測定されうるといふことは思いもつかなかつたことであり、また異なつた國における貨幣価値を比較する満足すべき方法があることを認めなかつた。このことは『経済的でも安定的な通貨のための諸提案』(Proposals for an Economical and Secure Currency)の中で、「通貨の価値は一つの商品との比較によつてではなく、多数の商品との比較によつて判断されうるものである」という主張がある。もし紙幣の発行者がこの種の基準によつて彼らの通貨の額を調整しようと望んでいることが容認されるとしても、もつともこれはどうてい容認され得ないものであるが、彼らはそうするためのなんらの手段ももたないであろう。なぜならば、諸商品の価値はそれぞれ

れの相互の間において絶えず変動しており、しかもこういう変動が起こったときに、どの商品の価値が上昇し、どの商品の価値が低下したのかを確かめることが不可能であるということを考えてみると、この種の基準がまったく役に立たないことが承認されねばならないからである。」と述べていることからもうかがわれる。

商品の価格は金属本位の下においても変動した故に、不換紙幣の下におけるその変動は通貨の過剰の程度の変動だけに帰せられない。イギリスの物価の状態から見ていることは、兌換停止下の価格と兌換停止以前のそれとの比較によって銀行券減価の事実を判断することである、とリカードオは考えたのであろう。そして、その銀行券減価の原因が兌換停止による過剰発行にあるとし、救済策として兌換再開を勧告したのであった。したがって彼は、兌換停止下と金本位制下との物価を比較することによって、兌換停止下における物価の状態を問題にしたのであり、物価騰貴の一般的原因を追求しようとしたのではなかったのである。

ともかくリカードオは、貨幣価値の決定に関してきわめて素朴な貨幣数量説を適用し、物価が貨幣量に比例して変動することを主張したが、他方、前述のように、商品の価格が需給関係よりもむしろ投下労働量に依存するとし、生産物市場における相対価格決定の過程を明らかにした。したがって貨幣量は絶対価格の決定に重要な役割を演ずるのであって、絶対的価格水準は、貨幣市場においてだけ決定されることになる。このことはすなわち、価格決定の過程を二分し、実物面において相対価格が、貨幣面において絶対価格がそれぞれ決定されるという、いわゆる古典的二分法 (Classical Dichotomy) にほかならない。

貨幣的要因が実物面になんら影響を与え得ないとする彼の立場は、「供給はそれ自らの需要を創造する」というセイの法則 (Say's Law) にもとづいていた。それは当然、貨幣の中立性を肯定することになるが、リカードオ

によれば、生産物は常に生産物、またはサービスによって買われ、貨幣は交換を果たすための媒介物にすぎなかった。セイに従って、需要は生産によってのみ制限されるのであるから、貨幣の供給量は産出量に適合するように調整されることになる。また彼は、ベンタム (Jeremy Bentham) の『物価論』 (Sur Les Prix) に対する評注において、「貨幣は財貨を喚起することができない。——しかし、財貨は貨幣を喚起することができる。……私は、貨幣の増大はめったに財貨の増大をひき起こさない、そして、仮にそうであっても、それは物価が新しい水準を見出す以前であろう、という意見である。」と述べているが、この一節においても、セイの法則の立場が表われている。ここにおいて、貨幣供給量は従属変数として取り扱われている。生産物の販売を促進するために、貨幣が市場に供給されなければならなかった。貨幣量が適当な割合で増加したなら、生産物はすべて消費され、過剰生産に関連するどんな周期的攪乱も生じないのである。生産物市場において均衡が維持されるかぎり、貨幣市場における均衡も確実に達成される。かくして、貨幣市場は生産物市場に従属させられ、そして、貨幣は生産水準に対して、なんら積極的作用を及ぼさないということになる。

- (1) Works, Vol. I, p. 105. 『リカード全集』I、一二三ページ。
- (2) Ibid., p. 298. 同上、三四三ページ。
- (3) Works, Vol. III, pp. 52—5. 『リカード全集』III、六五—八ページ。
- (4) Ibid., p. 193n. 同上、二二八—九ページ注。
- (5) Ibid., pp. 210—1. 同上、二四八ページ。
- (6) Works, Vol. IV, p. 59. 『リカード全集』IV、七〇ページ。
- (7) Jacob Viner, Studies in the Theory of International Trade, London, 1937, p. 127.

リカードオの貨幣理論に関する一考察

(80) Works, Vol. I, p. 292. 『リカード全集』Ⅰ、三三六ページ。

(90) Works, Vol. III, pp. 301—2. 『リカード全集』Ⅲ、三五七ページ。

四

これまで見てきたリカードオの見解では、貨幣的要因の作用が実物的領域から完全に排除されていた。彼は、経済活動の水準が実物的要因のみによって決定され、貨幣量は物価水準だけに影響を及ぼすという、古典派の原理がいかなる場合にも妥当すると考えていたのであろうか。

リカードオに影響を与えたと思われるヒューム (David Hume) も、同様に、貨幣数量説の見解を展開した。ヒュームによれば、貨幣は労働や商品の代表物にすぎないので、貨幣量の増加はそれに比例した物価の騰貴をもたらすが、貨幣量の増加が物価騰貴をひき起こすまでの中間期に、産業活動を促進させ、そして雇用を増加させる効果が注目されるという。すなわち、数量説は長期の均衡条件として成立するが、短期には、つまり貨幣量が増加する間は、その増加が実物面に刺激を与える可能性があるというのである。ヒュームは次のように述べている。「貨幣が以前よりも多量に流入し始めるあらゆる国においては、あらゆる物が新しい様相を呈することを知らず、すなわち、労働と産業活動とは生氣を帯び、商人は企業に一層熱心になり、製造業者は勤勉と熟練とを増し、農民でさえ、より敏速にかつ注意深く耕作するようになる。

……財貨の高価格は金銀の増加の必然的結果ではあるけれども、この増加に続いて直ちに生ずるものではなくて、貨幣が国の全体にあまねく流通し、その効果が国民のすべての階層に及ぶまでにはある時間の経過が必要な

のである。はじめのうちはなんらの変化も認められないが、やがて次第に一つの財貨から他の財貨へと価格は騰貴してゆき、ついには、すべての財貨の価格がこの国にある貴金屬の新しい分量にちょうど比例する点にまで達する。私の意見では、金銀の量の増加が産業活動にとって有利なのは、貨幣の取得と物価の騰貴との間隙ないし中間状態においてだけである。<sup>(1)</sup>

リカアドオと同じく地金論者であるソントン(Henry Thornton)は、『紙券信用論』(An Enquiry into the Nature and Effects of Paper Credit of Great Britain)の中でこのヒュームの文章を引用しているが、ソントンによれば、<sup>(2)</sup>紙幣の発行の増加は商品に対する需要を活発にし、消費を促し、そして在庫を減少させることによって生産と雇用を増大させ、その結果、労働と商品の価格が騰貴することになるといふ。すなわち彼は、貨幣量の増加↓取引への刺激↓経済活動の拡大↓賃金と物価の騰貴という作用経路を説明していたのである。

さらに地金論者であるマルサスは、リカアドオと異なり短期分析に重点をおいたのであるが、物価騰貴が産業活動に刺激を与えるというヒュームの見解に注目し、物価下落が産業を沈滞させると述べている。<sup>(3)</sup>そしてマルサスは、このような影響は穀物価格の下落によって生ずると考えた。

リカアドオは、この問題を『穀物の低価格が資本の利潤に及ぼす影響についての試論』(An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock)の中で取り上げているが、「たとえヒュームによってなされた観察が十分な根拠をもっているにしても、しかもそれは現在の場合には適用されないであろう。……貨幣価値の上昇はすべてのものを低廉にするが、これに対して穀物価格の下落は、労働の賃金を低下させるだけであつて、したがって利潤を高めるものである。」<sup>(4)</sup>と述べ、その結果、むしろ資本の蓄積はより促進され、産業は発

展し、国民的繁栄に導かれると結論する。このような見解から、彼は、穀物価格下落の原因となりうる穀物自由貿易を主張し、同時に、穀物輸入関税に反対したのであるが、これは穀物関税論争に関連する問題であり、本稿の対象外である。リカアドオは、穀物法や地金論争のような時事問題に焦点をあてることによって、現実の経済を分析し、その理論をうち立てたのであった。

貨幣量の増加が実物面に刺激を及ぼすというヒュームの見解は、その減少が逆の効果をもたらすであろうといふことを意味している。すなわち、貨幣供給が収縮するか、あるいは貨幣が退蔵によって流通から引き上げられる場合には物価は下落するが、物価が下落しつつある間、産業活動は沈滞し、雇用は減少するであろう。

リカアドオはこのような事実を原理として明確に表現しなかったが、暗黙のうちに認めていたのではないだろうか。それは先に見たように、セイの法則を中心命題とする彼の見解から推測されることは、商品の販売を促進するために貨幣が供給されるということ、すなわち、貨幣の供給量を取引の必要に適合させるということであつた。彼は、流通媒介物の需要が取引量の変化によって変動することを指摘している。<sup>(5)</sup>あまりにも少量の貨幣が創出されたなら販売の遅れの問題が生ずるのであるし、他方、あまりにも多量の貨幣が附加されたなら、当然、物価騰貴をもたらすことになるであろう。このことは、「貨幣市場と生産物市場の動態関係」<sup>(6)</sup>を示すものである。したがってリカアドオは、取引の必要を充たすために、貨幣供給量のある程度増加させることには賛成したと思われるが、しかし兌換停止下における急激な証券高の膨張は、それが物価騰貴に導くが故に反対したのである。

ソオントンは、為替相場の逆調が長期的に継続する場合には、銀行券の数量をある程度収縮させることによつ

て、金の流入を促すことが適切な方策であると考へた。しかしその非常に大幅なあるいは突然の収縮は、それ自身を無効にするような商取引における激変を生ずる恐れがあるから、取引量が拡大するにつれて発券高の膨張を徐々に、慎重に進めるべきであつて、このことがイングランド銀行および同様の状態にある金融機関が従うべき正しい政策であると主張した。<sup>(7)</sup>このようにソントンは、貨幣供給量の急激な収縮が商取引に及ぼす効果を明確に認めたのであつた。

貨幣的要因が実物面になんらかの影響をもたらすことに、リカアドオが注目していたと思われる箇所が『地金の高価』第四版の『付録』の中に見出される。この著書において彼は、当時の銀行券減価の原因が、結局、イングランド銀行券の過剰発行にもとづくものであると断言したが、『付録』の中で、通貨の減価が生産への一刺激物であると述べている。そして通貨の過剰、したがつてその減価が、資本と所得に対して再分配の効果をもたらすことを指摘し、通貨の減価は怠惰な人および固定所得で生活している人々の損失によつて、農民、製造業者および商人など生産者階級の利益を高め、その結果、国民の生産物、すなわち国民の富を増大させるというマルサスの見解に一応同意したのであつた。<sup>(8)</sup>

同様に、一八一五年六月二七日付、マルサス宛の手紙においても、リカアドオは、貨幣の減価が一般に蓄積の意向をもつてゐる階級に利益をもたらすことによつて有益なこともあるが、それは幸福を減ずることによつて富を増加させるのであり、労働者階級と固定所得で生活する人々に大きな圧迫を加えることによつてだけ利益をもたらすものであると書いてゐる。<sup>(9)</sup>

次に、実物面の原因が貨幣面に影響を及ぼすこともありうるが、この問題について、リカアドオはどのように

リカードオの貨幣理論に関する一考察

考えていたのであろうか。

ソントンは信用制度の下では、経済活動の拡張を助長するような実物的要因が、貨幣面に影響を及ぼすことを認めた。すなわち、借入れ額が主として、銀行に支払われる利子率と現行の商業利潤率との比較によって決定され、商業利潤率が割引率よりも高かった割合には貸付需要が増加するというのである。<sup>(10)</sup>

リカードオはソントンほど明確に表現しなかったが、類似の見解を述べている。彼によれば、<sup>(11)</sup>イングランド銀行への借入れの申込みは、それを用いて獲得されると考えられる利潤率と、同行が進んで貸し出す場合に得られる利子率との比較によって決定されるのであるから、その利子率が利潤率を下回ったならば、貸し出すことができる額には限界がないのであった。

ヒックス (John Hicks) は、このリカードオとソントンの見解に注目し、古典派理論においても、実物的原因のもつ貨幣効果が認識されていたと述べ、引き続き次のように説明を加えている。「SI曲線の上昇〔投資性の増加、あるいは貯蓄性の減少による〕が通常、信用膨張をもたらすはずだということを、ソントンは（さらにリカードオさえも）理解していた。そのような膨張を貨幣供給の増加と判断するか、それとも貨幣の流通速度の増加と判断するかは、貨幣をどう定義するかによる。もし前者の解釈をとれば、実物的原因の貨幣効果を認識することは、厳密な意味での貨幣数量説の形式的固守と両立可能である。<sup>(12)</sup>」

(11) David Hume, *Writings on Economics*, edited and introduced by Eugene Rotwein, London, 1955, pp. 37

— 8. 田中敏弘訳『ベーム・経済論集』五三一—四一三頁。

(12) Henry Thornton, *An Enquiry into the Nature and Effects of Paper Credit of Great Britain*, London,



1802; Hayek's Edition, London, 1939, p. 237. 渡辺佐平・杉本俊朗訳『ソーントン・紙券信用論』二六二ページ。

- (3) T. R. Malthus, The Grounds of an Opinion on the Policy of Restricting the Importation of Foreign Corn, London, 1815, p. 32.
- (4) Works, Vol. IV, pp. 36—7. 『リカード全集』IV、四五—六ページ。
- (5) Works, Vol. III, p. 247. 『リカード全集』III、二九〇ページ。
- (6) Michael J. Gootzeit, David Ricardo, New York, 1975, p. 13.
- (7) Thornton, op. cit., p. 259. 渡辺・杉本訳、二九〇ページ。拙稿「地金論争におけるソーントンの立場—リカードとの比較をめぐって」、『城西経済学会誌』第二二巻第一・二、三号合併号、二五六—二六六ページ参照。
- (8) Works, Vol. III, pp. 120—3. 『リカード全集』III、一四六—九ページ。
- (9) Works, Vol. VI, pp. 233—4. 『リカード全集』VI、二七四ページ。
- (10) Thornton, op. cit., pp. 254—5. 渡辺・杉本訳、二八四—五ページ。
- (11) Works, Vol. I, p. 364. 『リカード全集』I、四一八ページ。
- (12) John Hicks, Critical Essays in Monetary Theory, Oxford, 1967, pp. 152—3. 江沢太一・鬼木甫訳『ヒックス・貨幣理論』二〇六ページ。

## 五

前述のように、ヒューム、ソーントン、そしてマルサスなどは、貨幣的要因の変化が実物面に対して一時的・過渡的影響を及ぼしうることを言明した。リカードも、この事実を全く無視したわけではなく、十分理解して

リカードの貨幣理論に関する一考察

いたが、しかし、貨幣量の変化が正比例的な物価水準の変化をもたらすことだけを強調したために、彼は、貨幣的要因の作用が実物的領域から完全に排除されているという、単純な貨幣ヴェール観に撤していたかのようにいわれている。

古典的二分法克服の問題意識をもっていたヒックスは、貨幣的要因が実物面に作用する可能性があるということとを、リカードオが理解していなかったはずはないという。つまり、貨幣量の収縮は物価の下落をもたらすが、産業活動を沈滞させるということを、彼は確かに原理としては認めなかったが、行動の面では、あたかもこのことを信じているかのようであったと述べ、その理由を次のように説明している。すなわちヒックスによれば、リカードオはナポレオン戦争が終了したとき、通貨の安定を達成するために物価の若干の下落を受け入れる準備があったとはいうものの、物価の大幅な下落が望ましくないということを保証することに、きわめて深い関心をもっていたからである。そして、それが彼の地金案 (Ingot Plan) の目的であったわけであり、これは流通貨幣の過度の減少を阻止することを意図していたという。

事実、兌換再開にあたって、銀行券を金地金と兌換することを主張したリカードオの地金案は、よりわずかな金の蓄積をもって兌換を行なうこと、また金に対する需要の増加を防ぐことを意図したものであったが、金の購買力を高めることなしに兌換を再開することによって、物価の下落を最小限に抑えるという建設的な提案であったのである。<sup>(3)</sup>

リカードオが信奉した貨幣数量説は、長期の均衡条件として成立するのであるが、他方、貨幣的要因が実物面に影響を及ぼすという短期理論を彼は強調しなかったが、その見解の背後にもっていたということに注意しな

ればならない。リカードオがこのような短期理論を強調することを好まなかつた理由を、ヒックスは二つ挙げて<sup>(3)</sup>いる。

第一に、リカードオが静学的均衡の方法の創始者であつたということ。そして、当時の貨幣理論が特定の実際の問題、つまりある特定の種類の安定の回復に向けられていたために、このような問題は均衡という見地に立つた分析に適していたということである。

たしかにリカードオは、経済現象を観察するさいに、即時的、一時的な局面にはあまり注意を払わなかつたのであり、常に窮極の結果の分析に限定し、中間の場合が存在することを無視し、ときにはそれを否定さえしたのであつた。すなわちもっぱら均衡点のみを問題とし、均衡形成の過程を視野の外におくという、いわば比較静学的手法をとっているのである。彼のこのような分析方法はマルサスのそれと対照的であり、当時の為替相場逆調の原因をめぐつて彼らの間に意見の対立が見られた。リカードオが事実を単純化・一般化するとして、批判されたゆえんである。<sup>(4)</sup>

第二に、リカードオやその他の古典派経済学者たちも、短期の効果にあまり重点をおくと粗野な通貨膨張主義者に好都合になることを恐れたためであるという。

リカードオがこのように明確な問題意識をもつていたかどうか疑わしいが、先に見たように、彼は貨幣の減価が所得分配の不平等化をもたらすことを指摘していることから、その弊害をもたらす減価の原因である、イングランド銀行券の過剰発行に注目したのであつた。リカードオは、貨幣数量説にもとづく彼の理論を公式化することによって、「イングランド銀行に対し彼の考えていた改革、すなわち銀行券の価値を高め、そして兌換再開

を行なうために流通銀行券を収縮することを、もっと強く要求しようと考えていた<sup>(5)</sup>のであろう。彼が銀行券減価の唯一の原因を、その数量の過剰にあると主張したことに對して、リスト (Charles List) は次のように述べている。「思うにこのような主張をしたのは、彼が粗国愛に燃えていたからであり、このようにすることによって、イングランド銀行券に対する国民および諸外国の信頼を維持しようとしたものではなからうか。もしそうとすれば、『数量説』の起源が、戦時において自国の貨幣に対する信頼を動揺せしめたという非難に少しでも口実を与えないための、その提唱者の配慮にあったのであるということを考えるのは、興味あることである<sup>(6)</sup>。」

貨幣数量説を支持したリカードオはじめ地金論者たちは、彼らが強調したにせよ、しなかつたにせよ、貨幣的要因の変化が実物面に対して、一時的・過渡的影響を及ぼしうることを認めた。しかしそれが一時的・過渡的にとどまらず、持続的影響を与えうるという、貨幣的要因の非中立性にまで議論を進めるには至らなかつたのである。

銀行券減価の原因を中心問題とした地金論争は、結局、貨幣数量説の眞理性をめぐる論争であつた。地金論争は数量説が貨幣の価値を説明する基本的原理であることを認識させたが、他方において、経済理論を実物的タームで考えることが誤りであること、すなわち、実物分析から貨幣分析への移行の重要性を深く悟らせたのであつた。

(1) Hicks, op. cit., pp. 161-2. 江沢・鬼木訳、二一九—二〇ページ。

(2) 拙稿「リカードオの地金案について」『成城大学経済研究』第三号、一八〇ページ。

(3) Hicks, op. cit., p. 162. 江沢・鬼木訳、二二〇—二二一ページ。

(4) 拙稿「地金論者としてのマルサス—リカードオとの比較において—」『三田学会雑誌』第五七卷第一号、三五—五九ページ(金融学会編『金融論選集』XII、九—三五ページに再録。)参照。

(5) Charles Rist, *History of Monetary and Credit Theory from John Law to the Present Day*, translated by J. Degras, London, 1940, p. 157. 天沼紳一郎訳『貨幣信用学説史』一九三ページ。

(6) *Ibid.* 同上、一九二—三ページ。

筆者はかつて、成城大学経済学部在学中、岡田俊平先生のゼミナールにおいて先生より親しくご指導を頂いた。その後それが機縁となって、早稲田大学および慶応義塾大学の大学院において高垣寅次郎博士より教えを受けることになった。これまでの人生を振り返って、ふたりの良き師にめぐり会うことのできた幸いを思い、岡田先生の学恩に対して深く感謝する次第である。このたび先生の古稀記念論文集に、この拙い小稿を添えさせて頂く機会を得たことを心からお礼申し上げたい。